

蔵王町指定文化財

願行寺遺跡出土土偶

～珍しい腰掛け姿のポーズ土偶～

願行寺遺跡は、青麻山の東麓に営まれた縄文時代の遺跡です。この遺跡で耕作中に発見され、発見者によって大切に保管されてきた土偶は、その特異な姿形から学術的価値が高いものとして、平成8年に町指定文化財に指定されています。

土偶は、縄文時代に作られた人形の焼き物です。多くは直立した姿勢ですが、ここに展示した願行寺遺跡の土偶は腰を下ろして膝を曲げ、手を膝に乗せた姿勢をとっています。右腕・右脚と左脚の膝から下を欠損していますが、何かに腰掛けた姿を表現しているようです。手首には腕輪をはめ、腰の部分にはパンツのような表現があります。一般に妊婦の姿を表現した女性像とされる多くの土偶のような腹部とお尻の膨らみはないものの、上半身には明瞭な乳房の表現が見られます。頭部は平たく、後頭部には雲形文と呼ばれる文様が浮き彫りにされ、頭頂部は波状浮線文と呼ばれる文様で縁取られています。僅かに赤い顔料が残っていることから、少なくとも頭部と顔面は赤く塗られていたようです。

頭部の文様は縄文時代晩期（約3,000年前）の土器に多く用いられたもので、この土偶の製作時期を示しています。この土偶のように腰を下ろしたり、軽くかがんだりした姿勢をとるものはポーズ土偶と呼ばれ、縄文時代後期から晩期（約4,000～3,000年前）の東北から関東地方にかけての広い範囲に現れ、福島県福島市上岡遺跡の「しゃがむ土偶」（後期、国重要文化財）、青森県八戸市風張Ⅰ遺跡の「合掌土偶」（後期、国宝）、青森県平川市八幡崎遺跡の「膝に手をのせた土偶」（晩期）などが有名です。ポーズ土偶は縄文時代の中でもこの時期に特有である上、比較的短期間で姿を消し、発見例も少ないことから、土偶の中でも特殊な意味を持ったものと考えられています。

これらのポーズ土偶の上半身は腕を組んだり、膝にのせたり、後ろへ回したりと様々ですが、腰と膝を曲げるという点では全て共通しています。土偶の多くが妊婦を表現していることとポーズ土偶の姿勢とを考え合わせると、かつて日本でも戦前までは一般的であった「座産」の姿勢と関係があり、子を産むときに座ったり、腰掛けたり、また少し腰を浮かせたりした妊婦の姿を現したとする説が有力です。具体的な出産の場面を表現することで、当時の人々は安産へのより強い願いを込めたのかもしれません。

展示資料



土偶



小型壺



小型鉢

願行寺遺跡出土品

縄文時代晚期：約 3,000 年前
(個人蔵)